

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：64401

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13280

研究課題名(和文) アディゲ人の歌謡と舞踊にみる共同体意識とジェンダー観：ジョージアとの比較を通じて

研究課題名(英文) Community Consciousness and Gender Perspectives in Songs and Dances of the Adyghe People: Through a Comparison with Georgia

研究代表者

久岡 加枝 (Hisaoka, Kae)

国立民族学博物館・人類基礎理論研究部・外来研究員

研究者番号：70867168

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、コーカサス北西部のアディゲ(チェルケス)人の歌謡と舞踊を通じた共同体意識とジェンダー観について、アディゲ共和国におけるフィールド調査から考察した。ポストソ連期のアディゲ共和国の歌舞団では、トルコのディアスポラに伝わる舞踊が新たなレパートリーに取り入れられている。また、児童を対象とした公立の芸術学校では、20世紀以降の古い録音や楽譜をもとにコーカサス戦争をテーマとしたアディゲ語の古い歌謡が教えられ、民族の歴史を学ぶ機会が設けられている。ジョージアと比較した場合、アディゲ人には叙事歌が多く伝わること、さらにアディゲ人の多声的な歌謡において、東西間で形式の違いがみられる可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

新型コロナウイルス感染症とウクライナ戦争のため、アディゲ共和国で長期にわたる調査を実施することができなかった。しかしジョージアに渡航し、2022年のウクライナ戦争以降、ジョージアの人文の研究者の間で、ソ連崩壊後の対口関係の悪化から失われつつあったアディゲを含む北コーカサス地域とのつながりを再び強化しようとする動きが生じている状況を明らかにすることができた。

研究成果の概要(英文)：This study is based on field research in the Adyghe Republic of the Northwest Caucasus to investigate the formation process of community awareness and gender perspectives through the songs and dances of the Adygheans(Circassian). In the post-Soviet period, in the dance companies in Maykop, folk dances from the Turkish diaspora have been incorporated into the new repertoire. In public art schools for children, old songs in the Adyghe language about the Caucasian War are taught based on old recordings and scores since the 20th century, providing opportunities to learn about their history. In addition, this study pointed out that the Adygheans have more epic songs than Georgians, and furthermore, the stylistic difference of the polyphonic singing exists between the East(Kabardians) and West(Shapsugs). Georgians find cultural authenticity in the "peasantry" while Adygheans find it in the "nobility". It's due to their different experiences in modernity.

研究分野：文化人類学・民俗学

キーワード：アディゲ(チェルケス) ポリフォニー(多声部合唱) 叙事歌 コーカサス戦争 伝統復興

1. 研究開始当初の背景

英雄叙事詩などを題材とする多声部合唱に基づく伝承歌謡は南コーカサスのジョージア(グルジア)のほか、北コーカサスのアディゲ共和国、カラチャイ・チェルケス、カバルダ・バルカル共和国、アブハジア、南北オセチア、チェチェン、イングーシなどに伝わる。北コーカサス諸民族の伝承歌謡の比較研究は、20世紀以降、ジョージアの研究者を中心に進められ、Shilakadze(2007)、Maisuradze(1990)らをはじめとする音楽の研究者の間で、文化的共通性が見出されてきた。このような比較研究はソ連時代に盛んであり、当時のジョージアで、言語学者A・チコバヴァ(1898-1985)によって、ジョージアと北コーカサス諸民族の言語・文化の同族性を主張する「イヴェリア(古代ジョージアの国家)・コーカサス語族」学説が主張されたことが背景にあった。しかし、ソ連崩壊後のアブハジア(1992)および南オセチアにおける軍事衝突(2008)に伴うジョージアとロシアの関係の悪化から、北コーカサス諸民族の比較文化研究はここ数十年の間、停滞している。

2. 研究の目的

本研究では、ロシア連邦のコーカサス北西部のアディゲ(チェルケス)人の伝承歌謡および舞踊を通じた共同体意識とジェンダー観について考察する。また、アディゲと同様にコーカサス語族に属し、類似する形式の歌謡や舞踊が伝わるジョージアとの比較を通じて、アディゲ文化の実像を明らかにする。

12の氏族(現在では存在しない集団を含め)からなるアディゲ人は、コーカサス北西部の先住民であり、中世以降はイナル王(15世紀)の治世のもとで栄え、現在のソチを主邑に、タマン半島から南ロシアの内陸部一帯にかけて国家を形成したことで知られる。カバルド、ベスレネイ、チェムグイ、ハトゥカイなどのサブエスニック集団には、プシュ(Pschy)と呼ばれる諸侯が君臨したほか、クリミア・ハン国の末裔であるギレイ Gi rey 一族(アディゲ人の中ではハヌコ Khanuko と呼ばれた)も支配階級として君臨した。一方で19世紀にコーカサスに侵出したロシア帝国との戦争(コーカサス戦争 1817-1864)に敗れると、アディゲ人の多くはオスマン帝国に逃れ、「ムハージル」(信仰を貫くための移民)となった。しかし一部の人々は故郷に留まり、ソ連時代にコーカサス北西部に設立されたアディゲ、カラチャイ・チェルケス、カバルダ・バルカルなどの自治州およびクラスノダール州に定住した。トルコのアディゲ人ディアスポラの帰属意識については、Miyazawa(2004)の社会人類学的研究で詳細に考察されるが、コーカサス戦争以降も故郷に留まったアディゲ人の中で、どのような共同体意識が形成されてきたのかということに関しては、これまで十分に明らかにされてこなかった。

3. 研究の方法

本研究ではアディゲ人の「音」を介在とした歌謡や舞踊等の「行為」と共同体意識やジェンダー認識との関係について、アディゲ共和国の首都のマイコプ市をはじめ、その近郊のショフゲノフスキー地区におけるフィールド調査から明らかにする。また、マイコプ市の図書館や大学に保管される20世紀以降にアディゲ共和国のほか、カラチャイ・チェルケス、カバルダ・バルカル共和国、クラスノダール州などで収集された歌謡の録音や楽譜集も分析の対象とする。同様に現在のジョージアで、アディゲをはじめとする北コーカサス地域との学術的・文化的な交流が、どのように行われているのか調査を行う。

4. 研究成果

(1) 研究の実施状況

新型コロナウイルス感染症と、2022年以降のウクライナ戦争による渡航制限により、当初予定していたアディゲ共和国における長期にわたるフィールド調査を実施することができなかった。しかしながら、2021年に科研費での研究を中断し、カワイサウンド技術・音楽振興財団の研究助成で、アディゲ共和国に2か月間渡航し、マイコプ市とショフゲノフスキー地区、およびクラスノダール州で調査を実施することができた。帰国後の研究再開後は、これらの調査成果の分析を行い、ウクライナ戦争以降も、アディゲ共和国の音楽家、研究者とオンラインで交流を行い、調査を継続することができた。

(2) アディゲ共和国の歌謡と舞踊をめぐる現状

マイコプ市の歌舞団の代表者への聞き取り調査からは、ポストソ連期以降、19世紀のコーカサス戦争を経てトルコに移住したディアスポラとの交流が可能になり、トルコのアディゲ・ディアスポラに残る古い舞踊が、アディゲ民族舞踊の新たなレパートリーとして取り入れられたことが明らかになった。トルコに残る舞踊の中には、ソ連期の大規模な歌舞団の創設に象徴される近代化政策を経て失われものも含まれており、ポストソ連期以降は、トルコとの交流を通じて、伝統復興が行われている状況についても明らかになった。

一方で、トルコでは共和国建国(1923年)以降から1990年代まで、トルコ語以外の少数民族

の言語が社会的に抑圧されてきたこともあり、アディゲ語やカバルド語(東アディゲ)などによる歌謡の大部分は失われてしまった。一方で、建前上ではあるが、諸民族の平等が掲げられたソ連では、さまざまな民族の言語や文化の研究が推進され、アディゲ語やカバルド語による歌謡が採録されてきた。1930年代には、クバン地方のコサックの合唱団の指導に携わっていたロシア人の音楽家グリゴリー・コンツェーヴィチ(Kontsevich, 1863-1937)によって、アディゲ自治州(現在のアディゲ共和国)のさまざまな地域で歌謡や楽器の旋律の採録が行われた。コンツェーヴィチは、1937年にスターリン暗殺未遂容疑で処刑されたが、ソ連崩壊後に名誉回復を経た後、そのライフワークは『G. M. コンツェーヴィチの採録によるアディゲ人の音楽フォークロア』としてアディゲ共和国の出版局から刊行された。

1950年代以降はアディゲ人の研究者の間で、彼らの民族意識と結びついた歌謡の収集活動が行われるようになった。モスクワの舞台芸術アカデミーで学び、カバルダ・バルカル歴史学・文献学・経済学研究所の民俗学・文学部門に所属した歌手ザラムク・カルダングシェフ(カルダングシュとも、Kardangushev, 1918-2008)を中心に組織された調査隊によって、1950年代末から1970年代にかけてアディゲ、カラチャイ・チェルケス、カバルダ・バルカル自治州およびクラスノダール州で儀礼歌や労働歌、叙事歌の採録が行われた。

現在のマイコプ市の公立の芸術学校やショフゲノフスキー地区の文化会館の調査からは、ソ連時代の古い録音や楽譜をもとに、ポストソ連期に生まれた若い世代を含む人々の間で、民族アイデンティティと結びついた伝統文化の復興が行われていることが明らかになった。コーカサス戦争期のロシア軍との戦いをテーマとしたアディゲ語の歌謡も若い世代に伝えられ、古い歌謡を通じて、民族の歴史を知る機会が設けられていることが明らかになった。

アディゲ人よりもロシア人が多く暮らすマイコプ市では、2018年に19世紀のコーカサス戦争におけるアディゲ人の犠牲者の慰霊碑が建立されるなど、ロシア政府によって民族間の融和を図る政策が行われ、歌謡や舞踊をはじめとするアディゲ文化が、観光資源として活用されてきている。このような状況は、近年の日本における民族共生空間ウポボイ(2020年)の開設をめぐる政策と共通するものである。

(3) ジョージアにおけるアディゲ文化をめぐる状況

ウクライナ戦争以降、アディゲ共和国に渡航して調査を行うことが難しくなったため、ジョージアで長期にわたる調査を実施することにした。トビリシに2012年にジョージア文化省の下部組織として設立されたアディゲ(チェルケス)文化センターの活動について調査を行った。この機関には、ジョージア国内の比較言語学等を専門とする研究者のほか、アディゲ共和国をはじめとする北コーカサス出身の研究者が勤務しており、特にウクライナ戦争以降は、北コーカサスからトビリシに研究活動の拠点を移すケースが目立っている。ここでは、アディゲ語の教室が主催されるほか、アディゲやカバルダ・バルカルをはじめ、チェチェンやイングーシ、ダゲスタンなどの北コーカサスからさまざまな分野の研究者を招いた国際学会が開催されている。

一方で、トビリシのアディゲ文化センターにおける、北コーカサスからの研究者を招いた国際学会の開催をめぐることは、特にウクライナ戦争以降、ロシアの一部のメディアから、反ロシアのプロパガンダの温床となっているという批判も生じている。しかしながらウクライナ戦争以降のジョージア社会において、北コーカサスとの関係を深めようとする傾向は、強まっているように感じられた。2023年にはトビリシにイングーシ文化センター(非政府組織)が新設され、北コーカサスとの学術・文化交流をさらに推進しようとする動きが市民の間で生じている。

なお、ジョージアは世界で初めて、19世紀のコーカサス戦争におけるロシア帝国によるアディゲ人の虐殺を認めた国である。黒海沿岸のアブハジア近郊の都市アナクリアには、アディゲ文化センターが開設された2012年にコーカサス戦争の犠牲者の慰霊碑が建立された。アナクリアでは、毎年、コーカサス戦争が終結した月である5月に、コーカサス戦争の犠牲者の追悼式典が行われ、トルコのほか、カバルダ・バルカルなどの北コーカサスの共和国から追悼に訪れる。ジョージアは、トルコとロシアのアディゲ人の新たな交流拠点の一つとなっていることが明らかになった。

(4) アディゲ文化のルーツ：ジョージアとの比較を通じて

19世紀後半から地方に伝わる伝承歌謡の保存が都市部の知識人によって進められてきたジョージアでは、民族文化のルーツは、地方に暮らす「農民」に見出されてきたといえる。農村に暮らす人々は、都市の人々とは異なり、ジョージアの古い伝統的価値観を守り、ロシアや西欧、あるいはイランやトルコなどの影響とは無縁であり、彼らの歌をはじめとする文化こそが、真正な民族の文化であると考えられてきたからだ。このような価値観は現在も根強い。

一方で、アディゲ人の歌謡や舞踊において、「農民」の要素が文化的な真正性を裏付けるうえで強調されることはない。彼らの間では、「ウォルク・カファ Uork Kafa」(貴族の舞踊)に象徴される支配階級の要素に文化的な真正性が見出される傾向がある。特に舞踊は、かつて存在した彼らの国(Adyghe Kheku)の栄光を象徴する存在として位置づけられているといえる。このような民族間のアイデンティティの違いは、民族文化が形作られてきた近代以降の経験の違いを物語っている。

(5) アディゲ人の伝承歌謡

本研究では、アディゲ人の伝承歌謡のジャンルやポリフォニー(多声部合唱)の形式について、ジョージアの伝承歌謡との比較を試みた。アディゲ人の中では、現在スナ派のイスラム教が信仰されてきたが、彼らの伝承歌謡には、森の女神(Mezguasche)をはじめとする多神教的世界観に基づくものや、イスラム教以前に広まっていたと考えられる聖ゲオルギオス(Dauschzherdzhii)や予言者エリヤ(Elie)といったキリスト教の聖人にまつわるものも存在する。これらの聖人にまつわる歌謡はジョージアにおいても一般的である。また、アディゲ人に伝わる雨乞いの歌や天然痘などの病の治癒歌もジョージアと共通するジャンルである。

アディゲの歌謡において、ギブゼ Ghybze と呼ばれる悲劇的な内容に基づく叙事歌は、特に重要なジャンルであり、こうした叙事歌の多くはジョージアと同様に男性のみによって歌われる。アディゲの歌謡には、ジョージアと比較した場合、叙事歌が多く残っていると見える。叙事歌の内容は、ナルト叙事詩の英雄ソスルコの活躍を歌った神話的な性格のもののほか、19世紀のコーカサス戦争をはじめとする実際の出来事をテーマとしたものなど多岐に渡る。また、王侯貴族の内紛をテーマとした叙事歌も伝わり、16世紀に活躍したとされる英雄アンデミルカンの悲劇的な死を歌ったものがよく知られる。アンデミルカンは、イナル王の血筋を引く一方で、私生児という出自から差別的な扱いを受けたが、カスピ海北岸のアストラハン・ハン国への遠征で活躍し、一目置かれる存在となった。しかし彼の存在を快く思わないイナルの曾孫ベスランの謀略によって殺害された。

このような叙事歌が多く伝わる理由として、アディゲ人が19世紀まで聖職者などの一部の社会階層を除き、文字を持たなかったことが考えられる。文字を持たない社会において、さまざまな出来事を共有し、記憶し、伝えるうえで、多人数で歌われる叙事歌が、重要な役割を果たした可能性がある。このような叙事歌の多くは、ジェグアコ Dzheguako と呼ばれる民間の音楽家によって生み出されたと考えられている。優れたジェグアコは王侯貴族から庇護される存在であったという。

アディゲの歌謡は、歌詞を歌う独唱者と、「ジュ Zhyu(カバルド語ではエジュ Ezhu)」と呼ばれる伴唱によって歌われる。歌詞を伴わないジュはジョージアの歌謡の伴唱パート「バニ」と同様に複数で歌われる場合が多い。

シャプスグ、ブジェドゥグ、アブザフなどの西アディゲでは、二弦の擦弦楽器シチェブシン Shichepshinをはじめ、無簧の縦笛カミル KamyI、びんざさらのように複数の板を組み合わせた打楽器プハツィチ Pkhatsich といった楽器が歌謡の中で頻繁に用いられる。これらの楽器は、古くからあらゆる社会階層の間に浸透していたと考えられている。

西アディゲの歌謡は、弦楽器もしくは管楽器による旋律と、独唱者もしくはジュによるヘテロフォニー(類似した旋律がずれて演奏される)に基づくものが多い。もしくは、楽器の旋律が完全に独唱やジュの旋律から独立したポリフォニーに基づくものもある。かつてトウモロコシ畑の除草の際に歌われたシャプスグに伝わる歌では、独唱者とジュが交互に歌う「応唱」の形式もみられる。これはジョージア西部の労働歌にもみられる形式である。

叙事歌は、ジョージアと同様にブルドン(持続低音)の伴唱によって歌われるものが多い。ブルドンは、ジョージアと同様に、aやoといった音節を引き延ばすことによって歌われる。アディゲの歌謡のブルドンは、ジョージアと同様に、と の二つの音を基本とすることが多いが、ジョージアの歌謡にはあまりみられない といった進行もみられる。

カバルドなどの内陸部の集団の歌謡では、持続低音は平行五度やオクターヴで歌われることも多い。ジョージアの歌謡にはみられない形式である。

また、アディゲの伝承歌謡において、ジュは、必ずしも歌詞の旋律よりも低い音域に限定されるわけではない。黒海沿岸のシャプスグに伝わる、19世紀の婚礼における少女ファティマトの誤殺事件を歌った歌謡では、ジュは、歌詞を歌う独唱よりも高い音域で囃子詞(ai, a-a)を歌う。このような形式は、アディゲ人のみならず、黒海沿岸の叙事歌をはじめとする伝承歌謡に特徴的である可能性がある。ジョージア西部においても、クリミア戦争でトルコ側に付き、悲劇的な死を遂げた兵士を歌った歌謡ハサンベグラでは、歌詞を歌う独唱よりも高い音域で囃子詞が歌われることはよく知られる。

なお、アディゲ語で「歌」を意味する単語 orede (カバルド語では uerede)は、ジョージア西部やアブハジアの歌謡の中では囃子詞として登場するが、隣接する民族間の文化的なつながりを考慮する上で興味深い。

Ashkhotov(2009)や Guchev(2016, 2021)をはじめとするアディゲの音文化に関する主要な研究では、東部のカバルド、ベスレナイ、西部のシャプスグ、アブザフ、ブジェドゥグ等といった集団間の伝承歌謡の形式の違いについてあまり考察の焦点が当てられてこなかった。しかしながらアディゲ人の伝承歌謡には、東西の形式の違いが存在する可能性が明らかになった。

本研究からは、西アディゲの歌謡では、ヘテロフォニーのほか、独立した声部によるポリフォニー、さらに独唱者と伴唱が交互に歌う応唱が一般的であり、東アディゲの歌謡では、独唱者と五度、あるいはオクターヴのブルドン(持続低音)による形式が一般的であるという仮説が導き出された。このような仮説は、隣接する地域に居住するアブハズ人のほか、テュルク語族のカラチャイ・バルカル人、印欧語族のオセット人に伝わる類似する形式の歌謡との比較を通じて検証することが可能であると考えられる。

このほか、ガルモニあるいはアディゲ語でプシネ Pschyne と呼ばれる19世紀以降にロシアを

通じてコーカサスに入ってきた小型アコーディオン(ガルモニ Garmony と呼ばれる)についても調査を行った。西アディゲに広まるガルモニは、ダイアトニック・スケール(5つの全音と2つの半音で構成される7音階)に基づく。アディゲでは、ガルモニは、男性によって演奏される機会が多い。女性によってガルモニが演奏され、独創的な歌謡が生み出されてきたジョージアとは異なっている。このようなアディゲ社会の楽器にまつわるジェンダー観は、必ずしも宗教的な要因のみに起因するものではないと考えられる。ロシア内戦(1918-1922)で悲劇的な死を遂げた、アディゲ共和国のコシェハブルスキー地区出身のマゴメド・ハガウジュ(Khagaudzh, 1870-1918)に代表される男性のガルモニ奏者が、半ば伝説的に語り継がれてきたことも影響している可能性がある。

本研究の主な調査成果については、2022年2月に開催された民族芸術学会の研究例会「伝統ポリフォニーの諸相」で報告を行ったほか、2022年9月にトビリシ音楽院で開催された伝統ポリフォニーに関する国際シンポジウムで報告を行った。また、2023年に丸善出版から刊行された小松久男ほか編『中央ユーラシア文化事典』に項目「コーカサスの音楽」および「コーカサスの舞」として解説を執筆した。また、ナルトをはじめとする叙事詩についても、日本語で翻訳を出版し、研究成果として社会に還元していきたい。

引用文献

- Manana, Shilakadze. 2007 *T'raditsiuli samusik'o sak'ravebi da kartul-churdilok'avk'asiuri et'nok'ult'uruli urtiertobani*. Tbilisi. K'avk'asiuri sakhuli.
- Nino, Maisuradze. 1990 *Drevneishie etapy razvitiya gruzinskoi narodnoi muzyki*. Tbilisi. Metsniereba.
- Eiji, Miyazawa. 2004 *Memory Politics: Circassians of Uzunyayla, Turkey*. Department of Anthropology and Sociology Faculty of Arts and Humanities School of Oriental and African Studies, University of London.
- Beslan, Ashkhotov. 2009 *Adygskoe narodnoe mnogogolosie*. Nalchik. M. i V. Kotlyarovykh.
- Zamudin, Guchev. 2016 *Atras cherkesskogo(adygskogo) shichepshina*. Maikop. Kachestvo.
- Zamudin, Guchev. 2021 *Cherkesskii (adygs)*

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 久岡加枝	4. 巻 -
2. 論文標題 コーカサスの音楽	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小松久男ほか編『中央ユーラシア文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 久岡加枝	4. 巻 -
2. 論文標題 コーカサスの舞	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 小松久男ほか編『中央ユーラシア文化事典』丸善出版	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kae Hisaoka	4. 巻 14
2. 論文標題 East Asia and the north Caucasus: Epic Heritage and cross-cultural parallels	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Kavkaz-Forum	6. 最初と最後の頁 73-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Kae Hisaoka	4. 巻 7
2. 論文標題 Japanese Clappers Sasara and Naruko	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Music of Eurasia: Tradition and the Present	6. 最初と最後の頁 55-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 久岡加枝	4. 巻 543
2. 論文標題 ジョージア北東部における牧人と山岳民の暮らし	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 月刊みんぱく	6. 最初と最後の頁 18-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kae Hisaoka	4. 巻 33
2. 論文標題 A Foreigner's Essay on Georgian Traditional Music	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Bulletin, The V. Sarajishvili Tbilisi State Conservatoire International Research Center for Traditional Polyphony	6. 最初と最後の頁 22-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 アラ・ソコロヴァ、久岡加枝 (訳)	4. 巻 1055
2. 論文標題 音楽フォークロアにおけるジャンルの変容: 『シャミールの祈り』の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 35-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アラ・ソコロヴァ、久岡加枝 (訳)	4. 巻 1055
2. 論文標題 環ボントス圏のレズギンカ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アラ・ソコロヴァ、久岡加枝（訳）	4. 巻 1055
2. 論文標題 複合様式の事例としてのナウルスカヤのコリヤードカ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 64-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 アラ・ソコロヴァ、久岡加枝（訳）	4. 巻 1056
2. 論文標題 遊戯歌の多態性：クラスノダール州テムリューク地区の民俗学的・民族誌学的調査におけるクバン地方の録音資料に関して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ロシア・ユーラシアの社会	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 1件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Kae Hisaoka
2. 発表標題 Tendentsii razvitiya yaponskikh narodnykh tantsev v XX veke
3. 学会等名 Kul'turnye traditsii i khudozhestvennoe obrazovanie (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Kae Hisaoka
2. 発表標題 Preliminary Study on the Traditional Music around the Black Sea Coast: Focusing on Georgian and Circassian Ritual songs, Instruments and Polyphony
3. 学会等名 The 11th International Symposium on Traditional Polyphony (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kae Hisaoka
2. 発表標題 Some Similarities in the Nart and Kojiki
3. 学会等名 8th International Scientific Conference Development of Georgian-Ossetian Relationship (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 久岡加枝
2. 発表標題 アディゲ(チェルケス)人の伝統ポリフォニーについて: その音楽様式と現代における実践の場
3. 学会等名 民族芸術学会・第163回研究例会「伝統ポリフォニーの諸相」
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関